

黒漆地九曜紋若松鶴蒔絵女乗物 江戸時代

時代劇などで姫君が乗る駕籠を見たことがある人は多いだろう。しかし、その実物を目の当たりにする機会がある人はさほど多くはないかもしれない。美術工芸資料館で2009年5月28日から7月3日まで開催した「館所蔵名品展」において展示した黒漆地九曜紋若松鶴蒔絵女乗物は、その姫君が乗る駕籠の数少ない現存作例である。

女乗物とも呼ばれる駕籠は、わが国の工芸品のなかでも、その大きさという点では有数のものと言ってよい。当時の女性が小柄であったとはいえ、なにしろ人が一人乗るのである。しかも、駕籠のなかでも高貴な女性はそれなりに毅然としていたはずである。そのための空間が、当然用意されていたと考えてよいだろう。

2008年のNHKの大河ドラマ「篤姫」は、空前の?お姫様ブームを生み出した。みずからの主張をしっかりとって、時代の先を読むことのできた13代将軍徳川家定正室・篤姫の生き方に対する共感もあっただろうが、同時に、將軍夫人の華やかな生活もまた見る人の目を楽しませた。そして、この篤姫が実際に使用した女乗物がアメリカ合



衆国ワシントンのスミノニアン博物館に現存していることが2008年に確認された。葵紋が堂々とした豪華な女乗物である。再発見されたこの篤姫所用の女乗物を目玉にして「珠玉の輿—江戸と乗物」展が2008年12月16日から江戸東京博物館で開催された。この展覧会は、女乗物を中心にした展覧会としては、わが国ではじめて企画されたもので、前例のない画期的な展覧会であった。

日本では、古代から中世にかけて、人を乗せるものとして、まず輿が成立した。輿とは、御神輿の例でもわかるように、居室と呼ばれる人が乗る部分の底部に二本の担い棒を通し

た形式である。花嫁が輿に乗って嫁入りをした時代があり、いまでもお輿入れという言葉が残っている。この輿がやがて駕籠に変化をする。駕籠とは、輦と呼ばれる担い棒を居室の上部に一本通してつり下げる形式で、輿よりも安定感があり、機能的に優れていた。そして、やがて、日常的に駕籠が多く用いられるようになる。限られた人びとのあいだにはあるが定着した駕籠が、一方で、軽量化、乗物としての実用性を追求する方向に変化するのに対して、華美なまでに装飾的になった一群の駕籠があった。それが女乗物である。

女乗物は、形式としては駕籠の一種であるが、外装は漆、金銀の蒔絵などにより、さまざまな装飾、文様をほどこし、さらに家紋が加えられる場合もある。大名夫人など高貴な立場の女性の乗物であり、家紋がほどこされることからわかるように、婚礼に際してつくられる場合が多かった。女乗物は、内装もまた華麗である。多くの場合、日本の伝統的な絵画様式であるやまと絵による花鳥が描かれているが、場合によっては、源氏物語絵のような、やはりやまと絵による人物図が描かれる場合もある。いずれにしても、濃彩の華やかな絵画が内部を装飾している。内部の天井にもさまざまな絵が描かれ、また、装飾がほどこされる。

江戸時代から明治時代初期にかけて使用された女乗物はさほど多く残っているわけではない。徳川美術館、彦根城博物館といった旧大名の収蔵品を母体とする美術館・博物館には女乗物を収蔵している館もあるが、それとさほど多くはない。その重量や大きさ故に、そして、なによりも屋外で人を乗せるためのものであるという点で、どうしても損傷する確率が高く、保存が難しいという点があるからだ。

駕籠をさげる輦は一般的に4m近くの長さがあり、木胎に漆と金銀の蒔絵で、本体と同様の装飾をほどこす。現存する絵画史料によると、前後二人ずつの担ぎ手がいるのが通例であったと思われる。

美術工芸資料館が収蔵する黒漆地九曜紋若松鶴蒔絵女乗物は、大正2年(1913)4月30日に購入されたもので、購入時の価格は2500円であった。京都高等工芸学校時代であり、おそらくは図案資料としての購入であったと考えられる。教材としてどのような使われ方をしたのかについての記録は、残念ながら残っていない。寸法は通例の女乗物の大きさとだいたい同じで、114.0cm×79.3cm×103.9cmである。輦の長さは393.9cmである。煙草盆および煙管が附属しているが、本体とは意匠が異なる点から考えて、当初からセットでつくられたものではない可能性もある。

本体および輦には、全体に黒漆地に蒔絵で若松と鶴の装飾をほどこす。若松は形式化、文様化したものではなく、かたちを少しずつ変えて変化をつけている。幹の部分には高蒔絵という金蒔絵を盛り上げる表現を用いる。地の部分には、ところどころに粗く金粉を蒔き、地面をあらわす。また、若松の背後に銀を霞状に蒔くことにより、ある種の奥行き感もあらわそうとしている。

鶴もそれぞれかたちを変えてあらわされ、パターン化した印象は与えない。かたちだけでなく、表現技法の点でも、隣り合う鶴に発色の異なる金粉を用いたり、羽根の先を銀であらわす鶴がいるなど、蒔絵技法を尽くして多彩な表現を獲得している。いわゆる丹頂をあらわすために、頭頂部に赤漆を入れた鶴や目の周囲が赤い鶴も見られる。鶴はいずれも飛翔



するすがたであらわされている。

若松と鶴は、いずれも吉祥的な主題として好まれたもので、このことも女乗物が婚礼という言祝ぎの場で制作されたことを示している。

若松と鶴のあいだには、九曜紋を散らしている。九曜紋は細川家が用いた家紋であり、その点から考えると、この乗物は細川家の姫君が乗っていた可能性もあるが、伝来が不明であるために確実なことはわからない。紋は窓の枠にもほどこされている。この九曜紋は、蒔絵であらわしたものと赤みのある金の金貝を用いたものが交互に配されており、表現技

法の相違により、光り方や質感が異なり、視覚的效果を生み出している。

内部は、金地に白と黒で鶴を描き、緑青で松をあらわし、外装の意匠に呼応する表現になっている。内部の正面下部には地上で羽根をやすめる鶴が描かれているため、下方が地面であり、ひろびろとした空間が上方にひろがり、そこに鶴が舞い飛んでいる様子をあらわしていることがわかる。外装の蒔絵とは異なるやまと絵的な華やかさである。

格天井形式になっている内部の天井は、格子内部には、内装同様に金地にやまと絵的手法で水仙、桔梗などの花丸文を描く。

本作品は内外装ともに保存状態が良く、使用頻度が少なかったとも考えられるが、この種の物は修復や表面の張り替えをすることが多かったこともわかっているため、表面部分を直した可能性もある。

美術工芸資料館長 並木誠士